

随想



歌は世につれ

荒木 茅生

歌は世につれ世は歌につれ、と言う詞がある。昨年末、恒例の紅白歌合戦を見ていたが、若人達のフーリング的というか、ソング調が大半を占め、演歌調の減少が目立った。新聞等にも視聴者の意見では、大半がこの傾向に反発していた方が多かった。「くだらん、たかが流

行歌ではないか」とうそぶく者も中にはあるが、すでに歳末の一行事として定着した観があり、俳句の歳時記にまで登載されている事でもあれば、ミィーハ族と言われようとも関心をもたざるをえない。

ただこのように次から次へと新人が現われ目まぐるしいまでに唄巻巻がくり広げられている中で、果してあの明治時代から未だに唄いつがれている歌を知る者にとつて、この紅白に唄われた歌の、どれが百年先の世に残って歌いつがれてゆくのだろうか。けばけばしい服飾とアクシヨンの渦を見ながら心の一部にその様な感慨が湧くのを感じえなかった。

現在大流行を来たしているカラオケで、いざ自分が歌うとなると「船頭小唄」「放浪の歌」などで、新しい処で「浪曲子守唄」「無情の夢」「釜ヶ崎人情」など甚だお寒いレパートリーでしかありえない。

先日、偶然元の職場である国鉄のOB連と一緒にになったことから飲む中に「汽笛一声新橋を」で始まる鉄道唱歌を一同合唱したが、たまたま我が「熊本」を歌った部分を聞いたが誰も皆知らない。

かの西南の戦争に
その名ひびきし田原坂
見にゆく人は木葉より
おりて道きけ里人に

眠る間もなく熊本の町に着きたり我汽車は九州一の大会会人口五万四千あり

と私が唄うと、皆一様に目をみはった。その最後の一節「九州一の大会会、人口五万四千あり」の部分である。現在五十万を突破した熊本市の人口であるが、わずか五万四千人で九州一の大会会であったということが信じられないという。国鉄のOBがそれであるから今の若人達はおして知るべし。正に今昔の感しきりを覚える。ちなみに熊本市関係では

熊本城は西南の
役に名を得し無類の地
細川氏のかたみとて
今はおかるる六師団
町の名所は水前寺
公園きよく池ひろし
宮は紅葉の錦山
寺は法華の本妙寺

他一節があるが、この曲は新幹線の案内時のメロディーにも流されて、未だに根強く命脈を保っている。さきの紅白には、水前寺清子、八代亜紀、石川さゆりの三歌手が出場し万丈の気を吐いているが、願わくは幾百年の後まで唄いつがれる歌を残し、息長い歌手生命を続けられんことを密かに願うものである。

(歌人)

からゆきさんの古里を訪ねて

金井光子

肥後の女性史を、琴で綴ろう……と、一昨年取り組んでおられる辻久子先生の、第二回目は「からゆきさん」ということで、今回もその詩を私に依頼され、今、ようやくとめにかかっているが、その前に一度、多くのからゆきさんを送り出した崎津へ行ってみたいと思いい、一月の連休にやっと念願かなって末娘、ベテランドライバーの二女を連れて出かけた。なぜいつまでも決行しなかったかという、十年位前、一度、姉の家族と二台の車で下田、白鶴海岸、福岡城方面に行った事があった、その時あまりの道の悪さに、二度と山越えはしたくないと思った苦しい出があったからで、運転に少々自信がなかったからである。

その日は十二時に家を出発、私は助手席で、山崎朋子の「サンダカン八番娼館」と森崎和江の「からゆきさん」の二冊を読み返しながら、こみ上げてくる怒

りと、悲しみをおさえていると、あつという間に五橋を渡っていた。松島で、長男の成人式のお祝い返しにと、活けすの鯛を注文して本渡へ向かった。本渡から下田・牛深方面へ方向を変えると、もう安心して本を読む気持にはなれなかった。地図ひとつ手元になく、わずかな知識と、昔の記憶を頼りに、心はもう大江の天主堂へ行っていた。道路はいくらも良くなっていたが、一部の有料道路以外は、ダム工事などで切り開かれていく山肌から、裸にされた木々が、今にも落ちそうであった。下田温泉にたどり着いた時は三時過ぎ、そこからちょっと山を登ったところで、時間帯通行止めに公って二十分間ストップその時間の長く感じたこと……。そこで前の車に尋ねると、

天主堂はこの山を下りて、もう一つの山の中腹ということだった。そこから二十五分、右側に入口を表示してあったが通り過ぎてしまい、引き返して、車一台やっと通れる山道へ入ると、白い十字架が見えた。着いた、着いたと、子供のよう

に喜んでドアを開けると、そこだけがなぜか、冷たいみぞれが降っていた。下を見おろすと、山又山、その山ふところに包み込まれるように、ひっそりと民家があった。木々を渡る風が異様な音をたてている。心は残りながらも、もう追いたてられるように、山を下りた。他県ナンバーの車も数台すぐ後に続いて帰った。帰路も皆目わからないまま、始めは海

(詩人)

刀舟養生教室

刀舟 池田隆蔵

「歳(とし)だ歳だ」と言っているとほんとうに老人になってしまいます。「まだ若いまだ若い」と言っておりますと自然と若がえってくるから不思議なも

のであります。

「病氣だ病氣だ」といつていつまでも病氣の念にとらわれていまして、どんなりっぱな治療をしても病人はよくなりません。

ことばというものは実に不可思議なもの、イエス・キリストも「はじめにことばありき。ことばは命なり。ことばは神なり」と申しておられます。

結核患者などで、よく気分がわるいといつて、体温計で熱ばかりはかっている人がありますが、こんな人は、「やっぱり熱がある。やっぱり病氣がなおっていない」と、まいにちまいにち「悪い悪い」という病的観念を自分の心の中に貯蓄しているようになるので、なかなか病氣がよくならないのであります。

これを逆に、ひと思いに体温計をすてて、神さまのつくりたもうた人間の身体には病氣など本来あるはずがないと決心し、心の中に病氣の観念がなくなりますと、病氣はたちまち快復し健康になるのであります。

テレビや新聞などのクスリの広告にある、いやらしい病氣の症状の文字を読むことはもっとも悪いのであります。心に病氣の観念をつくるから、病的観念の具象化力(ぐしょうかりょく)によって病氣があらわれてくるのです。

病人に限って病氣に関する記事に心をひかれるのであります、クスリの広告などはいっしょうけんめい見るのであ

ります。これは、類似(るいじ)の観念は相引くという心理学的法則によるのでありまして、大きな広告にいっばい病氣のおどし文句が書いてあるのが目につくようになり、それがまた心に病氣の念をえがいて病氣を深めてゆく結果になるのであります。

「クーツク医師」というお芝居がありました。これはロシアの物語で、自分の村から病氣をなくしたいと願(がん)をかけた青年医師クーツクは、村の人びとを集めて健康教育をいたします。いろいろと病氣の症状や原因、予防法や治療法などを教えたのであります。するとどうでしょう。病氣が減るところか、その村の病人はかえって増えてきたのであります。

情報というのは物事の実状を知らせ、理解させることであります。が、「報」という字はもともと罪人にイレズミをほどこし万民にいましめ知らす意であります。いま世間に流れている医学情報が、真に健康を創(つく)る武器となるならばけっこうですが、病名や、くだらない症状をうのみにして、それによって病人が増えるようになったら、これは大へんなことであります。

「肉体は心の影、言葉は力」でありますから。

(医学博士)